

龍門二十品

啓功題籤

北魏碑刻造像聚珍

主編

劉景龍

中國大百科全書



分类号	
著者号	
登录号	33616

龍門二十品

——北魏碑刻造像聚珍

劉景龍 主編



中國大百科全書出版社

1997



图书在版编目(CIP)数据

龙门二十品/刘景龙著.-北京:中国大百科全书出版社,1997.8

ISBN 7-5000-5858-6

I. 龙… II. 刘… III. ①龙门石窟-画像石-图录②龙门石窟-碑帖-图录
IV. K879.232

中国版本图书馆 CIP 数据核字(97)第 15724 号

数字图书馆
PDG

翻 譯 馬如鳳
方 博
攝 影 陳志安
拓本拓印 曹社松
陳耀軒
拓本翻拍 鄭 華
線圖繪制 宋森才
封面設計 尤 偉
版式設計 常京山
責任編輯 朱星嫻
常京山

版權所有，翻印必究



龍門二十品

啓功題錢譜

代序

龍門石窟以造像藝術蜚聲中外，以造像題記著稱於世。從二千八百余件作品中精選的《龍門二十品》為魏碑書法的代表，上承漢隸，下啓唐楷，為歷代所重。

龍門石窟研究所所長劉景龍先生長期致力於龍門石窟的保護，近年又致力石窟造像、題記及宗教、書法等方面的研究，不循舊法，將造像題記與造像藝術融合一體，如實物資料、科學數據，精要闡述，成為一部命意新穎的佳作。

以上謹誌數語以為推薦。

沈 鵬

龍門石窟は高度な造像芸術として、中国国内だけではなく世界中で名声を博しており、また、それぞれの造像に対する題記の存在もよく知られている。これら2800余りの題記の中から精選された『龍門二十品』は、魏碑を代表する作品として、前の漢隸を継承し、後の唐楷に絶大な影響を与えたのであり、歴代の書家に重んじられてきた。

龍門石窟研究所所長の劉景龍先生は、長年に渡って石窟の保護に貢献されてきたが、近年は造像、題記等を宗教的、書法的角度から研究されてきた。本書はその結晶である。ここでは、造像題記と造像芸術が一体となって結実しており、それらについての的確な解説がなされている。さらに、精美で豊富な資料が数多く収められており、本書はこれまでにない新しい佳作となっている。

ここに、謹んで本書を推薦します。

宗憲、士法集、而、研、究、不、懈、
造像、題記、與、造像、藝、
術、融、合、一、體、實、物、資、料、科、學、數、
據、精、要、闡、述、成、為、一、部、命、意、
新、穎、之、佳、作、以、上、謹、誌、數、語、以、為、
推、薦、沈、鵬

龍門石窟以造像藝術蜚
聲中外，以造像題記著稱
於世。從二千八百餘件作品中
精選的《龍門二十品》為觀研
書法的代表，上承隸書，下啟
唐楷，為歷代所重。

龍門石窟研究所副所長劉宗義
先生長期致力於龍門石窟的保護，
近年又致力於石窟造像、題記及
宗教、書法等方面的研究，不憚

藝林珍寶

周紹良題



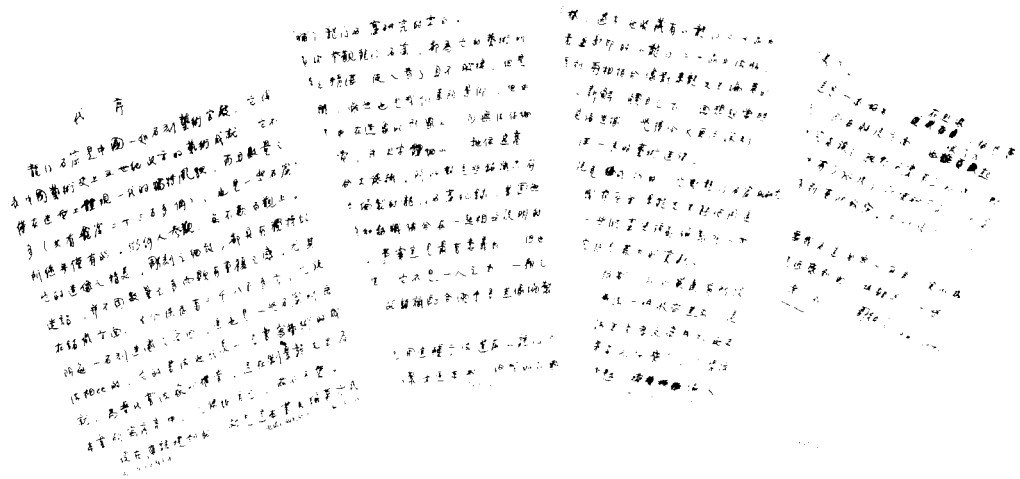
代序

龍門石窟是中國一處石刻藝術宮殿，它代表中國藝術史上五世紀北方的藝術成就，它不僅在造型上體現一代的獨特風貌，而且數量之多（共有窟龕二千三百多個），也是一些石窟所絕無僅有的。任何人參觀，無不嘆為觀止。它的造像之精美，雕刻之細緻，都具有獨特的造詣，並不因數量之多而顯有重復之感。尤其在銘識方面，至今保存有二千八百多方，它說明每一石刻造像之原因，這也是一些石窟所無法相比的，它的書法也代表一代書寫藝術的成就，為歷代書法家所推崇。這在劉景龍先生為本書所寫序言中，已詳細言之，茲不多贅。

現在應該提到的，就是這本書的編著方式，的確填補了龍門石窟研究的空白。

我們每次參觀龍門石窟，都為它的藝術所震驚，工藝之精湛，使人看了目不暇接，但是對於這些銘識，雖然也是我們素所景仰，但由於注意力都集中在造像的形象上，而無法仔細從事文字欣賞，並且字體細小，地位過高，也無法兩相配合去認識。所以對這些銘識只有忽略過去。現在編制的龍門石窟記錄之書固然不少，能把造像和銘識結合在一起相互說明的，還是絕無僅有。事實這是最有意義的，但也是一宗浩大的工程，它不是一人之力，一朝之間，把這數以千計的銘識配合兩千多造像編制出來。

劉景龍先生首先用這種方法選取《龍門二十品》作為嘗試，編制出這本書，給我的印象是，像我這樣，過去也收藏有《龍門二十品》的拓本，也



看過影印的《龍門二十品》法帖，但沒有今天看到兩相结合像劉景龍先生編著的這本書的印象之新鮮，觸目之下，回想起當時參觀石窟時所見諸造像，覺得今天更為深刻，更能清楚認識到深一步的藝術造詣。

這本書的編著可以說是成功的，它對龍門石窟的研究是有很大貢獻。我希望劉景龍先生能使用這一方法把龍門石窟一些洞窟陸續都編制成一部全集，這對學術研究將是莫大的貢獻。

這本書由於題目之限制，所以範圍有所限制，有些附帶的作品，無法一并收容進去，這是很遺憾的。如《比丘法生為孝文帝并北海王母子造像》，能把“佛弟子元伏榮”、“清信士元寶意”等的造像與榜題一齊編入，這就更善更美了。

總之，這是一本好書，在照相、拓片等方面都屬上乘，即在解說方面，也很了不起，使不搞石窟研究者讀了能對石窟有了認識，對《龍門二十品》有了認識；即使研究龍門石窟者讀之，也會感到有所啟發。所以說這本書的編著是成功的。

劉景龍先生要我為這書寫一序言，實不敢當，現在謹就讀後所感到的，拉雜寫了一些，略陳如上，以供參考，不敢作為序言也。

周紹良
1996年1月24日

龍門石窟は、中国の石刻芸術の宝庫であり、中国芸術史上、特に5世紀の中国北方芸術の完成を代表する傑作である。その造形が独特な時代の風貌を呈しているだけではなく、その数量においても、総2300余りの龕窟という大きさを誇っている。これは他の石窟には例を見ない特徴で、龍門石窟を参観するすべての人は、この数量に驚かすにはいられない。龍門石窟の造像は、その精美さと彫刻の細緻さにおいて独特な造詣を有し、更に夥しい数の中で重複を全く感じさせない。特に造像記等の碑記においては、2800余種が現在に至るまで保存されている。その全ては石刻造像の由来を記録したもので、これも他の石窟とは到底比較にならない数である。その書価値は、北魏時代の書の完成を顕著に示すものであり、歴代の書法家に尊崇されてきた。無論その内容に関しては、劉景龍先生の論文に詳しく説明されているので、贅言をさけたいと思う。

ところで、注目しなければならないのは、本書が今までの龍門石窟研究の空白を補填していることである。

というのは、われわれは龍門石窟を参観する度に、その芸術的造詣の深さと円熟みに感心し、造像の精巧な造りに目を奪われるばかりであって、造像記に関しては、その存在と価値を知っていても、文字をゆっくり見ることが殆どない。また造像記が高いところに位置している上に文字が小さいので、造像と併せて見ることは困難である。それ故に、今まで造像記の方は無視されがちであったし、編著された数多い研究書の中にも今回のように造像と造像記と一緒に解説するものがなかった。ここに本書の最大の意義があるのではないかと思う。と同時に、この作業は膨大なものであり、一人、あるいは短期間での2000を越える造像と造像記の整理は到底不可能である。

しかし、劉景龍先生は、この大仕事に果敢に挑戦し、上記の方法を用いて、まず「龍門二十品」の編著を試みられたのである。過去に「龍門二十品」の拓本を収蔵したり、影印本の法帖を鑑賞したりした私は、劉景龍先生の新しい試みによって編著された本書に新鮮な印象を受けた。龍門石窟を参観したときに見た諸々の造像を思い出しつつも、目の前にあるこの本の持つインパクトはさらに強く、龍門石窟芸術の造詣に対する理解もより深められたのである。

そういう意味において、この新しい試みは成功しており、龍門石窟の研究に大きく貢献するに違いない。欲を言えば、龍門石窟の他の石窟についても、劉景龍先生がこの方法で全集を編著し、学術研究に大きく貢献されることを期待している。

今回の出版は、タイトルの制限もあって、その範囲は限られたものとなった。周辺の商品資料として、例えば「比丘法生為孝文帝並北海王母子造像」の場合は、「仏弟子元伏榮」や「清信士元宝意」などの造像と題記も一緒に入れられたら、更に完璧なものになるのではないかと思う。それにしても本書は大変素晴らしい本である。写真と拓本は上質なもののばかりで、解説もすぐれている。石窟の研究に直接関わりのない人が読まれても、龍門石窟や、「龍門二十品」について強い印象をもって知ることができ、石窟の研究に携わっている人は、新たな啓発を受けるであろう。

劉景龍先生からこの本の序言を依頼されたが、恐縮するばかりである。ここに読後に感じたことをまとまりもなく記したが、序言とする自信はなく、読者の皆さんの参考になれば幸いである。

龍門二十品

——北魏碑刻造像聚珍

刻碑紀事，是中國古代的文化傳統之一。自從秦漢以來的兩千多年間，中國的先民們為我們留下了不可勝數的碑刻作品，構成了一個宏篇巨帙的石板歷史長卷。其中記載佛教發展史的碑刻，就占據着相當大的比重。

提起中國佛教藝術，人們便會自然地想到中國的三大石窟藝術寶庫——敦煌、雲岡、龍門。但若要論及佛教石窟中的碑刻作品，則首推龍門石窟。所以，龍門石窟自古就有“伊闕碑林”之稱。龍門石窟，位于河南省洛陽市以南13公里的伊水兩岸，這裡在古代被人們稱為“伊闕”。公元493年，以鮮卑族為主體的北魏王朝將首都遷到了洛陽，從此就開始了龍門石窟的雕造發展史。經過了北魏、東魏、北齊、隋、唐、北宋等朝代佛教信徒們的經營，終于造就了現存的大小窟龕2345所、碑刻題記2800多塊、造像十萬多尊，形成了一個大型的石刻藝術博物館，為我們研究佛教建築、雕刻藝術，以及中國古代音樂、書法、服飾、醫藥等提供了珍貴的歷史資料。本書向大家介紹的，主要是有關龍門碑刻書法方面的精品——龍門二十品。

在中國古代的書法藝術從漢隸向唐楷發展的過程中，魏碑體書法是一個十分重要的中間環節。在龍門石窟中，賓陽洞外的初唐書法家褚遂良書丹的《伊闕佛龕之碑》和開元十年補刻的奉先寺《大盧舍那像龕記》，分別是初、盛唐時期的楷書代表作。而龍門石窟的北魏碑刻，又是反映魏碑體書法的主要代表之一。龍門石窟中的北魏雕刻，大約占了東西兩山全部雕刻總數的三分之一，主要有古陽洞、賓陽洞、蓮花洞、魏字洞、普泰洞、皇甫公窟、慈香窟、路洞等。所謂的龍門二十品，就是龍門石窟中著名的二十件北魏碑刻題記，在古陽洞中保存了十九品，在慈香窟中保存了一品，可見古陽洞地位的重要性。

龍門石窟中的碑刻題記，記載的都是佛教信徒們為了某種願望而出資開窟龕造像的事跡。其實，即使在今天，中國的佛教信徒們也仍然保留着這樣的傳統。古陽洞是龍門石窟群中時代最早的一所洞窟，也是保存造像最多、碑刻題記最多的一所洞窟，其中的碑刻題記大約在二百品以上，內容極為豐富。古陽洞是由一個縱向長方形的天然溶洞加工修鑿而成的，在它的正壁雕着一尊高大的釋迦牟尼佛坐像，身披褒衣博帶式袈裟，面相長圓而清秀，顯得十分瀟灑自如，佛的兩旁各有一身頭戴花冠、佩戴項圈璎珞的菩薩立像，都是北魏孝文帝遷都洛陽以後不久的作品。在古陽洞的南北兩壁上層各排列着整齊的四所大龕，大小基本相等，龕內的主佛也都是結跏趺坐式的釋迦牟尼佛像。這八所大龕的龕楣和龕內造像的背光都雕刻着構圖精美、內容豐富、精巧富麗的裝飾紋樣。八大龕所保存下來的造像銘記，記載着跟隨孝文帝遷都洛陽的皇室貴族和洛陽地方官吏的敬佛功德，以及他們為孝文帝祈願的心情。在八大龕的上部直至窟頂的部位，分布着密集的圓拱形龕，龕內的主尊多是交腳坐姿的彌勒菩薩像；還有許多的千佛小龕，這些龕也多是皇室顯貴們的功德，龕外的造像銘記刻着他們為皇帝、為家族、為自己的祈福禳災所發的大願。古陽洞中的北魏十九品就包含在這裡。

慈香窟位于蓮花洞北側老龍窩的上方，是一所小型的佛殿窟，在窟內的倒凹字形基壇上雕着三世佛像與脅侍弟子、菩薩像，窟頂及壁面上浮雕着維摩詰與文殊菩薩對坐說法、衆飛天當空飛舞。龍門石窟二十品之一的比丘尼慈香慧政造像記就刻在基壇的西南折彎處。

龍門二十品包括：

1. 太和十七年至景明三年五月二十七日新城縣功曹孫秋生劉起祖二百人等造石像記。
2. 太和十九年十一月長樂王丘穆陵亮夫人尉遲爲亡息牛櫟造彌勒像記。
3. 太和十九年至二十三年都綰關口游激校尉司馬解伯達造彌勒像記。
4. 太和二十年步輦郎妻一弗氏爲亡夫張元祖造像記。
5. 太和二十二年九月十四日比丘慧成爲亡父始平公造石像記。
6. 太和二十二年九月二十三日北海王元詳爲母子平安造彌勒像記。
7. 太和末至正始末年陸渾縣功曹魏靈藏薛法紹造釋迦像記。
8. 太和末至正始末年邑主仇池楊大眼造石像記。
9. 景明年間比丘道匠造像六區記。
10. 景明年間北海王太妃高氏爲孫保造像記。
11. 景明二年九月三日雲陽伯鄭長猷爲亡父敬造彌勒像記。
12. 景明三年五月三十日邑主高樹唯那解伯都卅二人造石像記。
13. 景明三年五月三十日比丘惠感爲亡父母造彌勒像記。
14. 景明三年八月十八日廣川王祖母太侯爲亡夫廣川王賀蘭汗造彌勒像記。
15. 景明四年八月五日邑主馬振拜等卅四人造石像記。
16. 景明四年十月七日廣川王祖母太妃侯氏爲孫息延年造彌勒像記。
17. 景明四年十二月一日比丘法生爲孝文帝并北海王母子造像記。
18. 正始四年安定王元燮爲亡祖考妣等造釋迦像記。
19. 熙平二年七月二十日齊郡王元祐造像記。
20. 神龜三年三月二十日比丘尼慈香慧政造窟記。

古往今來，愛好碑刻書法的人士一般都會有收藏碑刻拓印的雅趣，針對龍門石窟的碑刻而言，收藏家與拓印碑刻的愛好者們也是情有獨鍾的。我們上面列出的龍門二十品就是書法鑒賞家與愛好者們經過長時間地品評、選擇，最後約定俗成的。龍門石窟大量的北魏造像題記，既是重要的歷史資料，也是珍貴的書法藝術品，其書體被稱爲魏碑體或者龍門體、北體、北碑、伊闕宗等，它是由書法家與刻工共同創造的一種書體。過去的碑拓收集者、臨習者及字畫商們，每每擇其精品拓集，以其所選品數而稱之爲二品、四品、十品、二十品、三十品、五十品、百品乃至千五百品，等等。龍門二十品就是在龍門四品和龍門十品的基礎上發展和確定的。清末學者黃易收集《始平公》、《孫秋生》、《魏靈藏》、《楊大眼》四品，繼之河南太守德林又選拓十品，即《高太妃》、《侯太妃》、《賀蘭汗》、《慈香》、《元燮》、《道匠》、《尉遲》、《高樹》、《元詳》、《鄭長猷》。以後，人們在此基礎上又增加了《一弗》、《優填王》、《惠感》、《法生》、《元祐》、《解伯達》六品，便約定俗成“龍門二十品”。二十品的名目最早出現于清末學者康有爲的《廣藝舟雙楫》和方若的《校碑隨筆》中。方若將二十品分爲上十種和下十種，下十種將唐代《優填王》一品列入，此二十品被稱爲“舊選龍門二十品”。康有爲認爲《優填王》一品“可謂非種，在必鋤之”。于是方若又用《馬振拜》一品將《優填王》換掉。更換後的龍門二十品被社會公認，通行至今。這二十品在龍門北魏近千品的碑刻題記中是最負盛名的，不愧爲龍門魏碑中的佳作和魏碑體書法中的精華。它們長期以來被人們視爲魏碑書體的法帖範本，不僅爲中國人所珍視，而且也享譽海外。

令人遺憾的是，1935年，洛陽市郊區邵莊村拓印者韓和德等人乘深夜架梯對《魏靈藏》、《解伯達》二品進行了大量拓印之後，將它們砸毀了，以期獨霸完整拓本，牟取暴利。如今，我們還能看到當年毀壞的殘跡。

龍門魏碑體書法藝術之美，學者們歷來喜歡引用康有為的觀點來加以說明。康有為在《廣藝舟雙楫》中說：“一曰魄力雄強，二曰氣象渾穆，三曰筆法跳越，四曰點畫峻厚，五曰意態奇逸，六曰精神飛動，七曰興趣酣足，八曰骨法洞達，九曰結構天成，十曰血肉豐美。是十美者，唯魏碑、南碑有之。”這二十品“自為一體，意象相近，皆雕峻偉茂，極意發宕，方筆之軌也。這中唯《法生》用圓筆耳。《北海王元詳》筆雖流美，仍非大異”。此外，“率皆雄拔。然約而分之，亦有數體，《楊大眼》、《魏靈藏》、《一弗》、《惠感》、《道匠》、《孫秋生》、《鄭長猷》，沈著勁重為一體。《長樂王》、《廣川王》、《太妃侯》、《高樹》端方峻整為一體。《解伯達》、《齊郡王》，峻骨妙氣為一體。《慈香》、《安定王元燮》峻蕩奇偉為一體。總而言之，皆可謂之龍門體也。”“《慈香造像》龍蟠鳳舞，縱橫相涉，闔闢相生，真章法之絕軌也。其用筆頓挫沈著，筋血俱露，北碑書無不骨肉停勻，筆鋒難驗，惟此碑使轉斫折，酣縱逸宕，其結體飛揚綿密，在魏碑中，可謂奇姿詭態矣。”“《楊大眼》、《惠感》、《鄭長猷》、《魏靈藏》波磔極意駿厲，猶是隸筆。”“《鄭長猷造像》皆上為漢分之別子，下為真書之鼻祖也。”可見，魏碑體既保留着漢隸的遺風，同時又孕育了唐楷的新體因素。

中國的書法多種多樣，研習者應該從哪一種先學起呢？有的主張先學篆書，有的主張先學行書、草字，也有的主張先習隸書的。而包世臣、康有為等人則認為應該從魏碑體書法學起，因為魏碑體屬於方筆書法，可以練習腕力，實際上就是主張應該從練習“龍門二十品”入手。他認為：“寸字方筆之碑，以《龍門造像》為美。《丘穆陵亮夫人尉遲造像》體方筆厚，畫平豎直，宜先學之。次之《楊大眼》骨力峻拔。遍臨諸品，終之《始平公》極意峻宕，骨格成，形體定，得其勢雄力厚，一生無靡弱之病，且學之亦易似。”“北碑當魏世，隸、楷錯變，無體不有。綜其大致，體莊茂而宕以逸氣，力沉着而出以澀筆。”“其為章也，龍蟠鳳舞，縱橫相涉，闔闢相生，其章法之絕軌也。”又說：“《楊大眼》若少年偏將，氣雄力健。”“《廣川王造像》如白門伎樂，裝束美麗。”“《元燮造像》如長戟修矛，盤馬自喜。”“《解伯達造像》雍容文章，踴躍武事。”“《慈香》如公孫舞劍，瀏亮渾脫。”“《楊大眼》、《魏靈藏》、《惠感》諸造像，巨刃揮天，大刀斬陣，無不以險勁為主。”“靡逸則有《元詳造像》，莊茂則有《孫秋生》、《太妃侯》、《長樂王》。”可以看出，在龍門二十品中，“龍門四品”又是魏碑體方筆書法中的佼佼者。

在龍門二十品中，還出現了多種的簡化字和異體字，如“萬”簡化為“万”，“彌”簡化為“弥”，“無”簡化為“无”，“與”簡化為“与”，“鳳”簡化為“凤”，“邇”簡化為“迓”，“龍”別寫為“𪛗”，“喪”別寫為“𣦵”等。這些簡化字和中國現在所使用的簡化字是相同的，它為我們研究漢字的簡化史提供了珍貴的資料。

龍門二十品還為研究龍門石窟的開鑿年代、補證史書之闕提供了資料。在二十品中，所涉及的人物有皇帝、親王、太妃、武將、洛陽地方官吏、佛教社團、僧人等，碑文中也常出現為皇帝歌功頌德，祈願“皇道赫寧”、“國祚永隆”之辭。在北海王元詳造像記中，記載了孝文帝“以親御六旌，南伐蕭逆”為名遷都洛陽的歷史事實。在楊大眼造像記中，記載了這位勇猛戰將的功績，“揮光也摧百萬于一掌，震英勇則九宇咸駭，存侍納則朝野必附。清王衢于三紛，掃雲鯨于天路”等等。北海王太妃高氏為孫保造像記，廣川王祖母太妃侯氏為孫息造像記，北海王元詳為母子平安造像記，廣川王祖母太妃侯為亡夫廣川王賀蘭汗造像記，比丘法生為孝文帝并北海王母子造像記，安定王元燮為亡祖考妣等造像記，齊郡王元祐造像記等等，又是我們研究北魏宗室世系的寶貴資料。

龍門二十品是龍門北魏碑刻書法中的代表作，而二十品所依存的窟龕造像又是北魏晚期佛教造像藝術中的精品。研究魏碑體書法藝術離不開龍門二十品，同樣，我們研究龍門石窟北魏晚期造像也離不開二十品所在的造像藝術。

優填王像北龕韓
曳雲等共造供養
優填王像南龕司
徒端等共造供養

優填王造像記拓本
優填王造像記の拓本

龍門二十品

——北魏の碑刻造像集珍

劉景龍

碑刻記事は中国古代の伝統文化のひとつである。秦漢時代から二千年間余りにわたって、中国人の祖先は碑刻の作品を数えきれなりほど残してくれ、これらは巨大な彫刻の歴史シリーズになっている。その中に仏教の碑刻は多く占めている。

中国仏教芸術を言うと、自然に三大石窟芸術宝庫に思い当たるはずである。それは敦煌、雲岡、龍門三大石窟である。但し仏教石窟の碑刻作品に関しては龍門石窟が一番である。だから昔から今まで「伊闕碑林」を呼ばれて来た。龍門石窟は河南省洛陽市の南にあって、その市から13キロ離れている伊水の両岸に位置している。この所は古代「伊闕」と呼ばれていた。紀元493年、鮮卑族を主とする北魏王朝は首都を洛陽に移し、その時から龍門石窟の彫刻の歴史が始まったのである。北魏、東魏、北齊、隋、唐、北宋を経て、仏教信徒たちの努力によって、龍門石窟は大きな石刻芸術の博物館となって来た。その中に大小2345窟があり、碑刻題記が2800枚余り、造像が10万基余り残っている。これらは仏教建築と彫刻芸術及びわが国古代の音楽・書道・服飾・医学などを研究するために貴重な歴史資料を提供した。この本は主として読者に龍門碑刻の書法の良質品である龍門二十品を紹介する。中国古代の書道芸術が漢時代の隸書から唐時代の楷書へ発展するうちに、魏碑体は重要な中間の一環である。龍門石窟の中では、賓陽洞の外にある初唐の書道家褚遂良の作品「伊闕仏龕之碑」と奉先寺にある開元10年補刻された「大廬舎那像龕記」はそれぞれ初唐と盛唐の楷書の代表的なものである。また、龍門石窟の北魏碑刻は魏碑体書道の主な代表の一つである。古陽洞・賓陽洞・蓮花洞・魏字洞・普泰洞・皇甫公窟・慈香窯・路洞などの石窟にある北魏彫刻は大体龍門石窟のすべての彫刻の三分の一を占めている。いわゆる龍門二十品とは龍門石窟の中に最も有名な二十点北魏碑刻題記のことで、古陽洞に十九品があり、慈香窯に一品がある。だから古陽洞の重要性が明らかである。

龍門石窟の碑刻題記には仏教徒たちが自分のある願いのために資金を出し石窟を作り造像したことが記載されている。実は今の中国の仏教徒たちはこの伝統を依然として保持している。古陽洞は龍門石窟の中で最も早く造られた洞窟の一つで、造像と碑刻題記も一番多く保存されている所である。その中に碑刻題記は約二百品以上あり、内容も極めて豊富である。古陽洞は縦長方形の天然鐘乳洞から改築したものであり、正壁に1体お釈迦様の座像が彫られている。寛服闊帶様式の袈裟を着て、顔が長円形で美しく、思いのままの様子である。両側に頭に色とりどりの帽子を被り、首に真珠と宝石の首輪をかけている菩薩が1体ずつ立っている。それは北魏孝文帝が京を洛陽に移転してからまもなくつくったものである。古陽洞の南北壁の上に大きさほぼ同じくらいの整然とした仏龕が四つずつ並んでいる。龕の中に跏趺坐と言う座り方をとるお釈迦様の座像が入っている。大龕の龕楣と造像の光背には構図精美、内容豊富、精巧華麗の装飾模様が彫刻されている。造像記には孝文帝に従って洛陽に移した皇室貴族と洛陽地方官吏たちの尊仏の功德と孝文帝のために祈る気持ち記載されている。大龕の上から天井まで、アーチ型の龕は密集して分布されている。龕の中の主仏の大部分は交脚して座る弥勒菩薩で、その他多くは千仏の小龕である。これらの小龕は皇室貴族たちの功德で、龕の外の造像記に皇室貴族たちが皇帝のため、家族のため、また自分の幸福と平安のために祈る願いが記録している。古陽洞の北魏十九品もこの中に含まれている。

慈香窯は蓮花洞の南側の老龍窩の上に位置して、小さい仏殿窟である。その窟にある「凹」という字をさかさにする形の基壇の上には三世仏像とそのそばに仕える弟子、菩薩像模様が彫られている。天井と壁の上には維摩詰と文殊菩薩とが向かい合って座って説法をしている様子、また多くの飛天が空を舞っている姿が彫られている。龍門石窟二十品の中の一つである比丘尼慈香慧政造像記はこの基壇の正面に彫られている。

1. 太和17年から景明3年まで新城県功曹孫秋生劉起祖二百人等造像記。
2. 太和19年11月「長樂王丘穆陵亮夫人尉遲造弥勒像記。
3. 太和19年から23年まで都綰關口遊激校尉司馬解伯達造弥勒像記。
4. 太和20年步輦郎妻一弗氏為亡夫張元祖造像記。
5. 太和22年9月14日比丘慧成為亡父始平公造像記。
6. 太和22年9月23日北海王元詳造弥勒像記。
7. 太和年末から正始年末まで陸渾県功曹魏靈藏薛法紹造釈迦像記。
8. 太和年末から正始年末まで邑主仇池楊大眼造石像記。
9. 景明年間比丘道匠造像六区記。
10. 景明年間北海王太妃高氏為孫保造像記。
11. 景明2年9月3日雲陽伯鄭長猷為亡父敬造弥勒像記。
12. 景明3年5月30日邑主高樹唯那解伯都等32人造石像記。
13. 景明3年5月30日比丘惠感為亡父母造弥勒像記。
14. 景明3年8月18日広川王祖母太妃侯為亡夫広川王賀蘭汗造弥勒像記。
15. 景明4年8月5日邑主馬振拜等34人造石像記。
16. 景明4年10月7日広川王祖母太妃侯氏為幼孫息延年造弥勒像記。
17. 景明4年12月1日比丘法生為文帝並北海王母子造像記。
18. 正始4年2月安定王元變為亡祖考妣等造釈迦像記。
19. 熙平2年7月20日齊郡王元祐造窟記。
20. 神龜3年3月20日比丘尼慈香慧政造像記。

昔から今まで碑刻書道を好む人たちは碑刻の拓本を収集する趣味がある。碑刻の拓本を好者人人は龍門石窟の碑刻に特殊な感情がある。右に列挙した龍門二十品は書道の鑑賞家と愛好者たちに長期にわたって評価され、選択され、最後に公認されたものである。龍門石窟の数多くの北魏造像記は価値のある重要な歴史資料であるし、貴重な書道芸術品でもある。この書体を魏碑体・龍門体・北体・北碑・伊闕宗などと呼ばれる。それは書道家と彫刻職人が共につくった書体である。

昔から拓本収集者や書道模写者や書画経営者たちは常に有名の作品を選択し拓本を取って収集してきた。数によつて二品・四品・十品・二十品・三十品・五十品・百品乃至千五百品などと呼ばれる。龍門二十品は四品と十品を基礎として発展し公認されたのである。清朝末期の学者黄易は「始平公」・「孫秋生」・「魏靈藏」・「楊大眼」四品を収集した。そのご河南の太守の徳林はまた「高太妃」・「侯太妃」・「賀蘭汗」・「慈香」・「元變」・「道丘」・「尉遲」・「高樹」・「元詳」・「鄭長猷」などの十品を選択した。この上また「一弗」・「優填王」・「惠感」・「法生」・「元祐」・「解伯達」などの六品を増したから、全部で二十品で、龍門二十品となっている。龍門二十品の名称は最初「広芸舟双楫」と「校碑隨筆」の本から出て来たのである（「広芸舟双楫」は清末の康有為に書かれているが、「校碑隨筆」は方若に書かれている）。方若は二十品を上十品と下十品に分けて、唐朝の「優填王」を下十品に組み入れた。この二十品は「旧選龍門二十品」と言う。康有為は「優填王」が「異種で除かれなければならない」と思ったので、

方若は「旧選龍門二十品」から「優填王」を「馬振拝」に取りかえた。この龍門二十品は公認されていて、今日に至るまで変わっていないものがある。龍門二十品は千に近い北魏碑刻題記の中で最も有名であり、龍門魏碑の傑作と結晶である。龍門二十品は魏碑体の手本とされ、中国人に重要視されるだけでなく、海外にもよく名声を博している。残念なことで、1935年洛陽市部庄村の韓和徳などは夜に「魏靈蔵」・「解伯達」二品を大量拓印してから、独占するためにそれを壊した。今、当時こわされたあとがまだはっきりと見える。

昔から学者たちは康有為の観点を引用して、龍門魏碑体書道の芸術的な美しさを説明することになる。

康有為は「広芸舟双楫」につぎのようにいっている。『一、気魄が雄強で、二、氣象が渾穆で、三、筆法が跳越で、四、点と画が峻厚で、五、意と形が奇逸で、六、氣持が飛動で、七、興味が酣足で、八、骨法が洞達で、九、構成が天成で、十、血と肉が豊美である。十美が魏碑と南碑である。』この二十品は『自身が一体となつて、意と象が近づいている。彫刻がすべて偉茂で、極意延引で、方筆の規範である。その中に「法生」だけが円筆で彫る。「北海王元祥」は筆法が十分に美しいのに大いに異彩を放たない。』その外に二十品は『みんな雄抜であるが、違いのある数体に分けられる。「楊大眼」・「魏靈蔵」・「一弗」・「恵感」・「道匠」・「孫秋生」・「鄭長猷」などは沈着、勁重で一体となる。「長樂王」・「広川王」・「太妃侯」・「高樹」などは端方峻整で一体となる。「解伯達」・「齊郡王」などは峻骨妙氣で一体となる。「慈香」・「安定王元燮」は峻蕩奇偉で一体となる。要するにすべては龍門の体である。』『「慈香造像」は竜がわだかまり、鳳が舞っている。縦と横は関連している。合わせと分けは相互に頼り生きている。書法の構成は絶対に規範に合っている。用筆は頓挫沈着で、筋と血がすべて表わしている。北魏の書法は骨と肉が停勻で、筆鋒が検証し難い。この碑だけは転・切・折が酣縱逸宕で、その構成が飛揚綿密で、魏碑の中に奇姿詭態だと言うことができる』『「楊大眼」・「恵感」・「鄭長猷」・「魏靈蔵」は波磔が極めて駿厲で隸書のようなものである。』『「鄭長猷造像」は漢の隸書と唐の楷書の間にある。』以上から、魏碑体は漢隸の風格を保留して、また唐楷の新体の要素を育てているということが分かる。

中国の字体が多くて、初心者はいったいどの字体から勉強すればいいであろうか。ある人は篆書を先に学習すると主張しているが、ある人は行書・草書を先に学習すると主張している。またある人も隸書を先に学習すると主張している。包世臣と康有為は魏碑体を先に学習するべきであると主張していた。魏碑体は方筆の格式に属しているので腕力を練習することができるそうです。つまり龍門二十品から練習し始めるべきだと言っている。かれらはつぎのようにいっている。『寸字方筆の碑は龍門造像が美しいのである。「丘穆亮夫人尉遲造像」の字体は方形で、筆画が濃厚で、横が平らで、縦が真っ直ぐで、先に適当に学習するべきである。次に「楊大眼」は骨力が峻拔で、全部臨模するべきである。最後に「始平公」は極意が峻宕で、骨格が成って、形体が決まって、氣勢が雄健で、力が濃厚で、無欠で、学習しやすいのである。』『北碑が魏に属するはずで、隸と楷が交錯して、すべての字体がある。大体に綜合して、形体が莊重で、力が沈着で、洪筆からなっている。』『この構成は竜がわだかまり、鳳が舞つて、縦と横が関連して、絶対な規範である。』『「楊大眼」は少年武官のような気持ちで雄健である。』『「広川王造像」は芸伎のような服飾がきれいである。』『「元燮造像」は弓を引いて矢を放すようで、馬に乗って喜んでいる。』『「解伯達造像」は筆画が割合に細く美しくきびきびしている。』『「慈香」は公孫が劍舞をするように、てきぱきしている。』『「楊大眼」・「魏靈蔵」・「恵感」などは、大刀